国際交流員ウルリーケ・シュラックの

今月のウリ場

特別編

今回はウリさんに代わって、2000年に「第8回グリムの里夏期日本語講習会」参加大学生として旧石橋町に訪れた、ヨーク・エベンシュヴァンガさんの登場です。（写真左）

こんにちは！ヨーク・エベンシュヴァンガと申します。2000年に旧石橋町のホストファミリープログラムに参加しました。当時ドイツのミュンヘン大学で日本語を勉強していて、実の日本の生活はどうなのかとわくわくして来ました。旧石橋町では、たくさんの面白い経験を積みました。そして、帰ってからもミュンヘンで日本語を頑張って勉強して、2006年に修士号をとりました。2007年からは妻と一緒に大阪に住んで、大阪大学の博士後期課程に入りました。私は日本の日常生活が大好きで、よく行く旅行や見物でいつもたくさんの面白い経験ができます。いまでもやはり日本の寺社、祭りなどに興味が強いです。しかしながら、年に1度ドイツに帰りたくなる衝動があります。

皆さんはクリスマスの時期にドイツに行ったことがありますか？日本と比べると確かに雰囲気が違いますよね。日本では、ちょっと寒くなってきた頃に、店頭に最初の電球のデコレーションを見ることができます。先週の新聞で、10月18日から大きなデパートで40万個の電球を使ったイルミネーションが点灯したという記事を読みました。10月24日からは外壁にクリスマスをモチーフにした電飾も発場すると書かれていました。そして、たくさんのお菓子屋さんではクリスマスケーキの申し込みが始まり、商店街のどこでもクリスマスキャロルが聞こえてくるようになり、「Jingle Bells」を流しながら色とりどりのクリスマスツリーも所々に飾られますよね。

では、ドイツのクリスマスとはどこが違うのでしょうか？12月24日から遡って4週間前の日曜日が、正式なアドヴェント(待降節)の始まりです。ドイツのデパートでもどこでもクリスマスキャロルが聞こえてきて、クリスマスのデコレーションが町中の雰囲気を変えます。電球のイルミネーションが飾られ、普段は朝市などが立つ教会前や市役所前の広場に、約1か月に渡ってログハウスが立ち並びます。このクリスマス・マーケットに足を踏み入れてみると、何と言ってもクリスマス用品の豊富さに圧倒されます。細密画が描かれた美しい球、わらを丁寧に編んだ星、窓辺に飾るイルミネーション、色とりどりのロウソク、かわいらしい形をしたクッキー、それらはそのままツリーに飾れるようにもなっています。子供たちがチョコレートでコーティングしたリンゴを食べている姿もあれば、大人が、屋台前のスタンドでソーセージをゆっくりと味わっている姿も見かけます。そこで厚いコートや肩掛けに包まり、散歩しながら味わうクッキーやレーブクーヘン、クリスマス・マーケットに欠かせないグリューワインの香りが漂っている雰囲気を楽しめます。グリューワインというのは、赤ワインにオレンジピールやチョウジなどの香辛料と砂糖を入れて温めたものです。これは、とてもおいしくて、また、寒空の下に体を温めるのにちょうどいいのです。グリューワインを手にマーケットを歩いていると、いつしかドイツの冬の幸せに浸っていくことでしょう。

ドイツでは、クリスマスは家族の祝祭で、子供がクリスマスの装飾を工作して、アドヴェントの期間中に窓を毎朝ひとつずつ開けていくアドヴェントカレンダーという柱暦を見て、わくわくしながらクリスマスまであと何日かと数えます。アドヴェントクランツというものも、どの家庭にもひとつおかれています。クランツとは冠の意味で、その名の通り、直径30-40㎝のもみの枝でできたリースに4本のキャンドルを立てたものです。アドヴェントの最初の日曜日（第1アドヴェント）に1本目のキャンドルに灯がともされ、第2アドヴェントには2本目のキャンドルに、第3・第4と1本ずつ灯をともして行き、クリスマスを待ち望みます。こういう慣習があるので、クリスマスの楽しみは段々と大きくなっていきます。クリスマス・イヴに大人はクリスマスツリーを飾り、プレゼントをツリーの下に置いて、その部屋を戸締りします。ミサから帰ってきたときにそのドアを開けて、子供がクリスマスツリーを見て、プレゼントをもらい、すごく喜びます。もちろん家庭によってやりかたは違いますが、大体どの家族でも1年の中で最も大切なお祭りです。ですから、今年もクリスマスにはドイツに帰ります。そうかと言って、1月には日本に戻ってきて、来年もまた日本でいろんな面白い経験ができて、日本の日常生活が味わえることを楽しみにしています。大阪からよろしくお願いします！

Jörg Ebenschwanger